The Japan Association of College English Teachers (JACET)

分野/Field: Others(小学校英語活動)

小学校英語におけるティームティーチングの影響

Effects of Team Teaching in English Activities

國本和恵（子供英語）

1. 英語好感度と心理要因の関係

本研究は，ティームティーチングに対する小学生の満足度（好感度，楽しさ，理解）が，心理要因（英語自己評価，英語コミュニケーション意欲，中学で英語を学習する意欲，英語学習動機，英語不安）に与える影響について検証する。

小学校英語活動は，英語に対する興味・関心や意欲の育成をねらいとし，「英語が好きだ」という気持ちを小学生が持ち続けられる英語活動であることが求められている（文部科学省, 2001）。英語を好きな気持ち（英語好感度）は，英語自己評価と英語コミュニケーション意欲，中学で英語を読み書き話す意欲に正の影響を与えていることが示唆されている（Kunimoto, 2006; 國本, 2006）。英語好感度が高いと英語自己評価，英語コミュニケーション意欲，中学で英語を読み書き話す意欲が高くなることが明らかとなっている。

小学校英語活動の指導者については，英語活動の主たる指導者の9割強が学級担任，そして，およそ6割がALT（外国語指導助手）である（文部科学省, 2006）。このような状況の中，学級担任とALTのティームティーチング（TT）に対する小学生の満足度（好感度，楽しさ，理解）が，英語に対する興味・関心や意欲に与えている影響について，調査の必要性があると思われる。

2. 目的

本研究は，TTへの満足度（低群/高群）と英語好感度（低群/高群）が心理要因（英語自己評価，英語コミュニケーション意欲，中学で英語を学習する意欲，英語学習動機，英語不安）に与える影響を検証する。

3. 方法

参加者である小学生268名（3年生73名，4年生68名，5年生66名，6年生61名）から，半年以上の英語圏滞在者と欠損値のあるデータを除いた結果，253名（3年生66名，4年生63名，5年生66名，6年生58名）のデータが分析された。

4. 結果

英語学習動機尺度（9項目）を主因子法によって探索的因子分析した結果，7回の反復で回転が収束し，累積因子寄与率は40.56%となり，2因子が抽出された。項目7は因子1への負荷量が.405，因子2への負荷量が.338と，因子1にも因子2にも入らないので，分析から除いた。項目7を除いた8項目に探索的因子分析を実施したところ，5回の反復で回転が収束し，累積因子寄与率は42.95%となり2因子（興味・有用性動機と不安回避動機）が抽出された。不安回避動機（$M = 3.2$, $SD = 0.7$, $\alpha = 0.20$）は信頼性係数が低いため，以下の分析から除いた。心理要因の平均値と信頼性係数を表1に示した。

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

表1 心理要因の平均値と信頼性係数

	英語好感度低群			英語好感度高群				
	TT 満足低	TT 満足高	Total	TT 満足低	TT 満足高	Total	Total	α
EWTC	2.2 (0.8)	2.3 (0.7)	2.2 (0.7)	3.0 (0.7)	3.2 (0.7)	3.2 (0.7)	2.7 (0.9)	.80
JEPC	1.4 (0.5)	1.7 (0.6)	1.5 (0.6)	2.3 (0.6)	2.6 (0.9)	2.5 (0.8)	2.0 (0.9)	.86
EPC	1.8 (0.6)	2.3 (0.8)	2.0 (0.7)	2.4 (0.7)	2.8 (0.7)	2.7 (0.7)	2.3 (0.8)	.76
EA	2.5 (0.7)	2.5 (0.6)	2.5 (0.6)	2.6 (0.6)	2.7 (0.7)	2.7 (0.7)	2.6 (0.7)	.82
M	1.6 (0.5)	1.8 (0.6)	1.6 (0.5)	2.1 (0.5)	2.7 (0.7)	2.6 (0.7)	2.1 (0.8)	.82
N	82	42	124	29	100	142	253	

注：EWTC=英語コミュニケーション意欲，JEPC=中学で英語を学習する意欲，EPC=英語自己評価，EA=英語不安，M=英語学習動機.

TT 満足度（低群/高群）と英語好感度（低群/高群）を独立変数として多変量分散分析を行ったところ，TT 満足度の主効果（Hotelling's = 0.239, F (1, 243) = 5,398）と英語好感度の主効果（Hotelling's = 0.239, F (1, 243) = 18,757）が有意であった。多重比較の結果，英語好感度は，英語コミュニケーション意欲（$F(1,249) = 81.14, p < .01$, partial η^2 =.25），中学で英語を学習する意欲（$F(1,249) = 71.17, p < .01$, partial η^2 =.12），英語自己評価（$F(1,249) = 35.37, p < .01$, partial η^2 =.12），英語学習動機（$F(1,249) = 74.42, p < .01$, partial η^2 =.23）に有意差があり，英語好感度低群より高群の平均値の方が高く，さらに，TT 満足度は，英語自己評価（$F(1,249) = 18.77, p < .01$, partial η^2 =.07），英語学習動機（$F(1,249) = 23.80, p < .01$, partial η^2 =.09）に有意差があり，TT 満足度低群より高群の平均値の方が高いことが確認された。

5. まとめ

TT 満足度は，英語好感度と比較すると英語活動における影響が少ないが，英語自己評価と英語学習動機という，英語活動の中でも重要な要素に影響を与えていることが示唆された。本研究では，TT 満足度の要素として，好感度，楽しさ，理解をあげたが，それら一つ一つが心理要因にどのような影響を与えているか明らかとなっていない。これら要素についてさらに調査が必要であると思われる。

参考文献

Kunimoto, K. (2006). What variables does the perceived competence of young English learners consist of?: A comparison between 4th and 5th graders. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 17, 211-220.

國本和恵 (2006).「小学校における英語学習者の心理要因に関する量的研究－学年・学習時間の影響に焦点をあてて－」『教育学研究ジャーナル』第3号, 9-18.

國本和恵 (2007).「英語リスニング能力と英語自己評価の関係－小学4・5年生の発達段階による差の検討－」『日本教科教育学会誌』第29巻, 9-18.

文部科学省 (2001).『小学校英語活動実践の手引き』東京：開隆堂

文部科学省 (2006).「外国語専門部会第14回配布資料」Retrieved September 11, 2006, from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/015/06032708/003.pdf

NII-Electronic Library Service